

現代日本の敬語

高橋 君平

夏目漱石に「吾輩は猫である」と題する長篇小説があります。それを外国語に直訳すると、

中国語では …… 我 是 猫

英語では …… I am a cat.

ドイツ語では …… Ich bin ein Kater.

フランス語では …… Je suis un chat.

となり、しかもこれ以外には表現の仕様がなまいこととす。ところが日本語はどうでしょう。

口語 対話体 ①わたくし は 猫 です(であります)

②わたし は 猫 である

記述体 ③僕(おれ) は 猫 だ

④吾輩 は 猫 である

文語 …… ⑤我(われ) は 猫 なり

というようにいろいろちがった表現ができます。この五句は意味は少しも変っていない、全く同じなのです。一つの意味を表わすのに五つも六つもちがった表現の仕方があるということは、一見世界に類の少ない日本語

のむつかしさを示しているもののように思うでしょう。

言語はしかし同一意義を表わすのに各別の数種の形式があるというような複雑なものでは、その機能を適正に果たすことができないのです。

日本語について言えば、

文語はいま用いないから除外すると、口語だけになり、その口語には対話体と記述体の二つの文体がありま
す。或は二つしかありません。その他は語彙(単語)の相異で、文法や文体には関係ありません。

日本語には二つの文体の相異があるということは明確にしておかねばなりません。でないとな文法を論ずる場
合、特に敬語を論究する際に混乱が起きます。

二つの文体といってもその相異は語彙的なもので簡単でしかも規則的だから、現代日本語はやはり一つの文
法に公約されてしまうのです。文法の生成性と循環性から、必然にそうならざるを得ないのです。

外国人は対話体として①、記述体として②、を習得するだけでいいのです。といっても、②の動詞“であ
る”が①では“です”という丁寧語に替るだけで、文法は少しも変わりません。

対話体と記述体

対話体は人と話をするときに用いるもので、いわゆる丁寧語がこれに当ります。

日本人は隣人には迷惑をかけるものではない、少なくとも人を不愉快にさせたくないものだ、と心掛けてお
ります。その心持が言語に現われたのが対話体であります。対話体は一般に敬意を表わす助動詞“です”“ま
す”で述語を終結するから、自然に丁寧になります。或は丁寧にしたいから“です”“ます”を添加します。
いま助動詞“です”“ます”を仮に丁寧語と命ずることにしましょう。

下宿のおばさん、アパートの管理人、市場、デパート、魚屋・八百屋、肉屋、日用雑貨や学用品・薬品化粧

品などを売る店、飛行機・汽車・バスの車掌や運転手、国会議員、公務員、会社員、友人・学生・教師、農夫でも職人でも、幼稚園児でも、大学の教授でも、要するに老若男女を問わず、社会のあらゆる階層職種の誰でも話をするときには対話体を用います。

それから手紙は書くものですが、特定の人に話しかけるのですから、やはり対話体でなければなりません。多数の人に向ってなされる講義・講演・演説なども近頃はみな対話体になりました。

日常生活で口で話すことは、負担を感じるほどの体力上の消耗も時間のロスもないから、どうしても冗漫（ジヨウマン）ながたらしく）になりがちですが、同じ長さの言語を書写するとすると、エネルギーにも時間も数倍・十数倍の負担がかかってきます。よって書写はできるだけ簡単にしたいという欲求が起るのは人情の自然です。これを言語の求約性とか経済性ということができるところでしょう。一方書写は特定人に話しかけるのではないから丁寧にする必要はない、意味を正確に伝えればいいのだから、丁寧語を添加する必要はありません。このように丁寧語を添加せず、表現を能う限り簡潔にしぼったものが記述体であります。

記述体はものを書くときに用いる文体で、著述・論文・レポート・試験の答案・小説・随筆・公文書・法律や各種規定の条文、それから新聞雑誌など、手紙を除くあらゆる書きものや印刷物に用います。

記述体

花は美しい 美しくない

わたしは猫である 猫でない

学校へ行くか 行かない

飯（ご飯）をたべる たべない

対話体

花は美しいです 美しくありません

わたしは猫です（であります） 猫で「は」ありません

学校へ行きますか 行きません

ご飯をたべます たべません

この例文でわかるように、対話体と記述体との相異は一般に述語に丁寧語という助動詞で句を終止するか否

かによるのです。対話体から丁寧を取去ってそれだけ短くなったものが記述体と考えていいでしょう。対話体と記述体との関係も一つの循環性であります。

ここで注意しなければならないのは対話体は記述体に代用できるが、その逆は通用しないということです。例えば著述・レポート・試験の答案・いろいろの印刷物などは対話体で書いてもむろん差支えないが、日常の対話や手紙は記述体は避けねばなりません。

しかし多数の読者を対象とする著作類一般は、やはりできるだけ簡潔明快な記述体が望ましい。印刷上の手間ヒマ、紙幅の大小、それから読書時間の長短などから自然にそういう結論になります。（わたしがこの一篇をわざと対話体で書いているのは、外国人のために見本を示すつもりなのです）

外国人は日本人と話すときは対話体を用いれば、それで十分丁寧になります。別に敬語を考慮する必要はありません。

わたくし・ぼく・おれ・吾輩（わがはい）、などは語彙の相異だから辞典の領域であり文法とは関係がありません。

日本語では人称代詞は時と場合を問わず常に、

自称（一人称）は「わた（く）し」「わた（く）したち」

対称（二人称）は「あなた」「あなたがた」「みなさん」

他称（三人称）は、あの人（方）、○○氏、などという定称はない。近來は彼、彼女、なども用いるようです。

我、你、他、I, you, he, のように一字で表わす本字がないのが、大きな欠点と思われるが、国語審議会あたりで、一字で表わす人称代詞を定めてくれたらどんなに便利でしょう。

日本語では「である」「が」「です」になるのを除き、コトバが長くなるとそれだけゆるやかに丁寧になる

のです。例えば、

記述体

対話体

猫である

猫であります、でございます

行く

行きます、まいります

話ができなければ話になりませんから、日本語はやはり対話体から入門すべきでしょう。ラジオやテレビにもすぐつながります。ただそうすると毎日読む新聞・雑誌・書籍とのつながりをどうするかの問題が起きるが、対話と記述の相異は先にも言ったように大約、丁寧語の有無によるのだから、文体の区別を明確にすれば記述体は自然に理解できるようになるでしょう。

敬語

敬語を論ずるためにはまず文体の相異を明確にしておく必要があります。対話体と記述体の相異はすでに一応論究したのですが、対話体はいわゆる丁寧体で、敬体の下限です、或は最低の敬体です。

ここで例文についてそれを確認しておきましょう。

新聞記事は簡潔に書かれているので、文体の相異を見るに便利です。

記述体の例文

① ポンピドー仏大統領は二十四日、訪米公式日程を開始、午前中ニクソン米大統領と二時間会談ののち、ナショナル、プレスクラブで昼食と演説をおこない、夜ホワイトハウス夕食会に出席した。ニクソン大統領との会談は、ニクソン氏の執務室ではじめられ、中東、欧州、中ソ関係、米ソ戦略兵器制限交渉(SALT)など、広範囲な国際問題にわたって友好的、建設的かつ詳細な意見交換をおこなったといわれる。(この「われ」は受身の助動詞で、表敬助動詞ではない)

② ニクソン大統領との間で沖縄返還を取決めようとする佐藤首相は、愛知外相、木村官房副長官らを伴い、十七日午前十時十二分、日航特別機でワシントン郊外のダレス国際空港に到着した。

空港には日本側から下田駐米大使、…米側からジョンソン國務次官、マイヤー駐日大使…らが出迎えた。首相は特別機に横付けとなった「動く待合室」に乗込み、そこで出迎える人たちとあいさつをかわした。

一番ゲートから空港ロビーに姿を見せた佐藤首相は出迎える報道陣に軽く会釈したのち、

④ 「一九七〇年代を迎えようとするこの時期に米政府首脳と沖縄問題をはじめとする諸問題を率直に話し合い新たな日米信頼関係、協力関係を築きたい」との到着声明を読みあげた。（四四・一一・一九朝日西部）

①は二人の大統領について、②は日本の総理大臣について記述しているのだが、どちらも一言半句も敬語が用いられていないことに注意されたい。これによって次の文法が得られるのです。

(1) 記述体には敬語は不必要である。

(2) 最高の地位に在る人に対しても敬語は不必要である。その限り今では敬語には階級性も照応もない。

(3) ただし日本では皇室に関する記事だけは、いままなおわずかに敬語を用いる。（次の例文③を参照）

対話体と敬語

③ 皇太子ご夫妻は十九日午前十一時十五分東京、羽田発の日航特別機でマレーシア・シンガポール両国への親善訪問旅行に出発された。ご夫妻は二十八日午後五時十分羽田着で帰国になる。

空港には常陸宮妃ら皇族方、佐藤首相はじめ各閣僚・モン・ジャマルディン・マレーシア臨時代理大使夫妻・アン・コック・ベン・シンガポール大使夫妻らがお見送りした。（このおは謙讓性）

ご夫妻は次のように出発の言葉を述べられた。（要旨）

⑧ 両国はわが国と終始親交を深めてきましたが、近年、めざましい発展を続け、わが国との関係はま

すまず緊密の度を加えてきております。わたくしたちはできるかぎり両国の実情を見聞し、多くの人々と会う機会を持ちたいと思ひます。このたびのわたくしたちの訪問が両国との交友親善に役立つことになればと念願しております。（四五・二一・二〇朝日西部）

③を②と比較すると、②には出てこないお・ご・らる。が、明瞭に浮びあがるが、これがすなわち敬語であります。

④は皇太子が見送りの人々に向つて述べられた言葉です。紛れもない対話体です。“すまず”という終結語が四見することによってそれが証明されます。しかし敬語が一語も出てきませんから、丁寧ではあるが、直ちに敬語体とは言ひ切れないのです。これで対話体と敬語との区別が明瞭になつたでしょう。

②に出てくる④は、報道陣に向つて述べた佐藤首相の声明文ですから④と同じ性格のもですが文体がまるでちがいます。何故なら本来④と同じように対話体——“すまず”体で書かれたものを、新聞は冗漫を嫌つて要旨を記述体に書換えたからです。ここでも記述体と対話体の相異が理解されたことと思ひます。以上を要約すると、

日本語は記述体と対話体と二つの文体がある。或は二つの文体しかない。その二つの文体のどれにでも表敬詞を添加したときに、それを便宜上敬語体というのであり、二つの文体と対等に敬語体という別の文体があるのではありません。

では敬語——表敬詞とは何でしょう。

動詞に現われる敬語

主語、賓語の資格によつて、敬語と謙語の区別が出てくるが、敬・謙を分けると煩雑になるし、今では分ける必要がなくなつたから、一様に敬語とみなす。

「やる」の敬語は「あげる」（上げる）

「もらう」の敬語は「いただく」（頂く）

「くれる」の敬語は「くださる」（下さる）

敬語動詞

する、の敬語は「なさる」「いたす」（謙語）

「なさる」は「する」に表敬助動詞「らる」が複合してできた敬語であろう。

する、動詞は、熟語や外来語に後付して、最もよく複合動詞を構成する：

○案内する 到着する 離陸する 勤務する 結婚する

○デートする アピールする 運動する ブランコする ゴルフする

○麻雀する 体操する 賭け事する 試験する 旅行する

○ひるねする くしゃみする ままごとする おしっこする ……無数……

○私が案内する し十ない し十ます しません

十符は動詞と助動詞を分ける。助動詞につづくために動詞語尾が「し」と変化するのは、活用。この文法は以下すべての例文について同じ。「私が案内します」と言うと、「し」が単音で促拙の感じとなるから、「案内いたしました」と長く延ばして、より丁寧にすることができる。がこういう敬語は必ずしも用いなくてもいいのです。対話体で十分丁寧になるのだから。

○案内する し十ない した し十なかった

対話… します しません しました しませんでした

敬語… いたします いたしません いたしました いたしませんでした

○総理が到着する　　しない　　した　　しなかった

対話：　到着します　　しません　　しました　　しませんでした

敬語：　到着なさる　　なさらない　　なさった　　なさらなかった

　　なさいます　　なさいません　　なさいました　　なさいませんでした

する、は動詞だから、前掲の複合動詞は二、三を除き、みな「を」する」という「賓（目的語）一動」形に改変できる。（一符は賓語と動詞を分ける）この場合「する」動詞の活用は、複合動詞の場合と全く同じ。

○勉強を一する　　を一しない　　を一しなかった

対話：　をします　　をしません　　をしませんでした

敬語：　をなさる　　なさらない　　なさいませんでした

○止めよ　　やめなさい　　○待て　　待ちなさい（二例は命令形）

与える意味の動詞「やる」、その敬語は「あげる（上げる）」。「一符は賓語と動詞を分ける」。

動詞　やる　もらう

○人に　ものを一やる

○鉛筆を君に一やる（やろう）　君に鉛筆を一やる

○先生（あなた）に本を一冊一あげる（あげましょう）　本を一冊先生に一あげる

記述：　やる　　やらない　　やった　　やらなかった

対話：　やります　　やりません　　やりました　　やりませんでした

敬語：　あげる　　あげない　　あげた　　あげなかった　　あげます　　あげません　　あげました

あげませんでした

一人に “ものを” と二つ賓語があるときは、日本語では、その位置を自由に前後できる。（右掲例文参照）
一般により強調するものを前に置く。敬語動詞は、対話体（丁寧助動詞）で句を終結することが多い。

○あなたにこの本を一あげましょう（あげます）

“あげます” と言い切るより、“あげましょう” と長く延ばすと、より丁寧になる。

“やる” は助動詞としてもよく用いられる：

○僕が書いて（話して、教えて）十やる

○私が書いて十あげる（あげます、あげましょう）

他者のために依頼するときは、次のように言う：

○彼に書いて（話して、教えて、…）十やって（あげて）十下さい

もらう↓いただく（主語が他者から与えられる）

○僕は彼からこの本を—もらう（もらった） ○学校から賞を—もらう

記述… もらう もらわない もらった もらわなかった

対話… もらいます もらいません— もらいました もらいませんでした

敬語… いただく いただかない いただかなかった

いただきます いただきますせん いただきますませんでした

助 動 詞 もらう もらった

○詳細を一話して十もらった（もらいました）

○先生から話して（読んで、教えて）十いただいた（いただきました）

○〔あなたに〕書いて十いただく（時枝六〇）

動詞 くれる↓くださる（下さる）…他者主語が話手に与える。…“くださる”は“くれる”に表敬助動詞“らる”が複合したものでしょう。

○彼は〔僕に〕ノートをくれた（くれました）

○先生は〔私に〕参考書をくださった（くださいました）

記述… くれる くない くれた くれなかった

対話… くれます くれません くれました くれませんでした

敬語… くださる くださらぬ くださった くださらなかった

助動詞

○この本は父が買って+くれた（くれました）

○この絵を先生がほめて+くださった（くださいました）

○…を一話して（教えて、読んで…）+ください…願望を表わす命令形

○これを君に+くれて+やる などという言い方もある。

受身の助動詞“らる”による表敬法

話手が自らを“される”立場に退くことによって謙讓の意を表わすことから、漸次表敬助動詞に転化したもの。この敬体句では、主語は話手から尊敬を受ける資格者であり、話手ではあり得ない。

記述体

○先生（会長、総理）がいった

敬体 いわれた

対話体 いいました

敬体 いわれました

今では、“言う”という動詞に、申す（謙）、仰せられる↓おっしゃる、という敬語を用いる必要はない。“らる”助動詞の後付によって十分に表敬できるのだから。

○来る：お客様が来られる。 ○読んだ：先生が全部読まれた（赤六一三八三）

（註：赤六一三八三とは昭和四〇年明治書院発行「国語文法講座」（赤表紙）第六冊三八三頁の意、以下同じ）

赤六一三八三頁に敬語の例文として「読まれる、来られる」：助動詞

と出ているが、ただこれだけでは、敬語・受身・可能の区別はできない、どんな瑣細な文法でも、主語・述語の配合に成る「句の構造形態」を見なければ定めようがない。僕らが常に必ず「句の構造形態を見る」というのはこの意味である。

らる、られる、は受身には必ず用いるし、可能の助動詞としてもよく用いられるから、それとの混同を避ける用意が必要であるが、句の構造形態を見、背景を参考すれば、その区別は容易にできる。

受 身（受身句の主語は必ず受動の主体）

○私は先生にほめられ「まし」た。 ○兄に叱られ「まし」た

○子に泣かれる（赤三一一九六）。 ○案内状は送られた（赤一一二六）

○僕が買った本は弟にさきに読まれた（赤六一三八三）

○彼女は若くして主人に死なれ、子供に先だたれた

「赤三」はこの受身を「不利を受ける意味が強い」（二二七頁）とか、「受損態」（一九六頁）とか説明します。岩波全書の「漢文入門」一七三頁もそういうし、中国の文法家も大抵そうです。しかしこれほど奇妙な解説はない。そんなら「ほめられる」は受損か、ですぐ行詰る。ところが赤三一一九六頁は、今度はそれを「受益態も表わす」という。しかしそんな理論が成り立つものでしょうか。同一の表現形式が＋（正）も－（反）も表わすというなら、その瞬間から言語機能は麻痺し、コトバは崩壊するほかはない。こんな解り易い道理が解らぬとは全く解らん。また仮に百歩を譲って受損、受益両用であるとしても、しからば「手紙は送られ」本は読

まれ”といったら、これは一体損か益かですぐにまた壁にぶつかってしまふ。こういう説明の仕方をわれわれは意義論文法という。われわれが二〇年も前から形態論を提唱しているのは客観的具体的な要件でなければ基準にならないと考えるからです。句の構造形態、これだけです、文法の基準になるのは。

大統領に選ばれる、抜擢される、ほめられる、よろこばれる、釈放される、…から 送られる、読まれる、…なぐられる、捕えられる、死を宣告される、殺される、…まで

受身になる動詞の数だけ意味の相異があり、それを言葉で一つ一つ定義づけられるものではない。この場合“らる”はただ「受身を表す助動詞」といえばそれで全部解決します。重要なのはその“らる”が受身か可能か表敬かを明確に区別することである。がその方法は意味表現に対応する「句の構造形態」と背景を見るほかはない。句の構造形態、これがあらゆる文法の基準でないだろうか。

可 能

対 話 体

○雨がふっても来「ら」れる(赤六一三八三) 来られます、これです

○僕は漢字も読まれる(よめる)(同右) 読まれます、よめます

○彼はロシア語が話される(はなせる) 話せます(はなすことができます)

○今からでも見られる(みれる) 見られます、みれます

○これはまだ食べられる(たべれる) 食べられます、たべれます

来れる、読める、話せる、見れる、食べれる、と省縮させたのは表敬と受身とから区別するための音変であらうか。これる、よめる、はなせる、みれる、たべれる、なら可能に確定し、表敬・受身にはならない。

使役の助動詞“させ”による述語の表敬化

自らを「させられ」る位置におくことよって謙讓の気持を表わす。

○「面倒さまですが、乗車券を拝見させていただきます（赤五―三二八） 敬語がたくさん累加されているので話手の低姿勢が想見できる。

○「「面倒さま」とは考えて見れば随分妙な敬語の使い方です。

○「ちょっと」発言させていただきます（同右）

○これから司会をさせていただきます（赤六―三八三）

例文で見るとこの「させて」には「いただく」という敬語を連用し、「ます」で納めるのが通例である。「いただきます」に「下さい」を代用することもできるが、これでは言葉が短過ぎる嫌いがある。

○ではご説明させていただきます（赤五―三三二）

○これから案内させていただきます（同右）

○会をはじめさせていただきます（同右）

動詞「説明する」「案内する」には「はつけるべきでないだろう。これは「説明（案内）させていただきますか」「案内（説明）いたします」でいいのではないか。（こは謙語性）

単なる使役表現は敬体にはならない。使役か敬体かは構造形態と背景を見れば明瞭

記述体

対話体

○学生に練習させる（赤五―一九一）

練習させます

○本を読ませる（同―二〇四）

読ませます

○学校に行かせ「てやる」（赤三―二〇〇）

行かせ「てやり」ます

○試験を受けさせ〔てや〕る(同右)

受けさせ〔てやり〕ます

○気分を落着かせる(赤五―二〇四)

落着かせます

○気分を養わせる(同右)

養わせませす

○落着いて読ませる(同右)

読ませませす

赤五―二〇四頁が後三例を「文法上の誤」というのは錯覚であろう。むしろ他動詞に言い改める必要はない、改めれば構造が変り、使役義が消滅するだけ。気分が落着く(自動詞) 気分を養う 落着いて読む

表敬の接頭詞 お・ご(御)

接尾詞 さん・さま(様)

記述体ではいかなる敬語も用いる必要はない。このことは本項最初の「記述体の例文」ですで見ただ通りである。

対話体で表敬の接頭詞や接尾詞をつけるか否かには文法上の規制はないが、一般通行の慣例に従わねばならぬのは言うまでもない。慣行はすなわち文法だから。

1 称 呼

さん・さま は人にだけ用いる。口頭では誰彼の差別なくあらゆる人をすべて「さん」で呼ぶ、高校生ぐら
いまでの男子は「くん(君)」でもいい。

高根正三郎さん 稲田淑子さん： 山田さん 田中さん 秦さん：

文雄さん たか子さん かつおさん： 太郎くん 晋作君 山田君：

「さん」と「さま」に軽重をつけたい感情が残るかも知れないが、「さん」一本に簡素化する方がいいのではないか。少なくとも外国人は「さん」だけでいいのです。使い分けができる程度に習熟するまでは「〇〇く

ん”は用いない方が望ましい。

幼童に物語を話すとき、亀さん・兎さん・お猿さん、…などというのは擬人化による愛称で、敬語ではない。
役職名はそのまま敬語になる

係長 課長 補佐 部長 局長 専務 社長…

先生 次官 大臣 総理 総裁 総長…

教諭 講師 教授 館長 学長 教頭 校長…

対称 は誰に向っても “あなた”、教員や医師には “先生” という慣行がある。

“あなた”に当てる一つの本字があれば、手紙にはことに便利であり、“貴様”を最高の敬称と誤認する失敗も絶えるだろう。

手紙の宛名は、すべて “〇〇様”、役職名にはその下に一般に “殿”。

多人数による集会・団体・各種組織、それから国公私立の各種機関などには “御中”。

2 名 詞

加否について文法上の規制はないが、つけるとすれば、一般に漢語にはご、和語にはお。

A つけることに固定したもの

ご飯 お菜 おかず お惣菜 おはぎ おかき おつむ おむつ …

これらはそのまま一つの語彙とみなされる。

B 食べもの、日常の必需品には、大切なものという考えから敬語としてつけたものだが、だんだん範囲が拡大される傾向にあるのはほどほどにしたいものである。

お米 お茶 お湯 … みそ 醤油 汁 塩 砂糖 酒 … 魚 肉 すし 弁当 …

大根 いも まめ なす …… もち しるこ 雑煮 菓子 …… りんご みかん

お釜 鍋 皿 箸 盆 茶碗 膳 ……

布団 風呂 おかね 化粧 花 ……

ちゃ、ゆ、など単音詞は、もちろんだが、二音詞までは、カキ、クリ、モモ、など紛らわしくなるものを除きつける方がスムーズになる。三音詞以上でも、往々女性はつけたがるが、接頭音としてある程度やむを得ないだろう。

外来語には一般につけない。

ナイフ フォーク スプーン ……

ビール コーヒー ココア ミルク ソース カステラ ケーキ …… 紅茶 羊羹 …… トイレ

累加のままで用いられるもの

おみおつけ おみくじ お医者さん おかみさん お子さん お嬢さん(様) おばさん(二様の意味あり)

…… おじいさん おばあさん お父さん お母さん 「お」兄さん 「お」姉さん お手伝さん

「令」はもと美称だが、漢土からの外来語ということと、語調の関係で、もう一つ「ご」をつけたいという人もあるらしい。以下は堅苦しく、日常對話にはほとんど用いない。

令夫人 「ご」令息 「ご」令嬢 令兄 令弟

×ご舎弟(舎は令と反対の謙詞だから、ごはつけられない)日本では昔から誤用のまま、ごをつけて敬語に定着今は用いない。

尊父はそのまま敬称だが、ご尊父↓ご尊父様 などと累加する場合が多い。

令・尊・舎・拙などは漢語から来た文語の遺留であるが、今では令と拙(作・文・稿・宅・生…)が稀に用

いられるだけ。

(1) 原則としては、記述体には「お」「ご」はつけない。

(2) コトバを優美にする—音を多くすることによってコトバを柔らかくし、語調をととのえる—(だから女性に多いが)ために、敬語としてではなく、接頭(尾)語として、ある程度の「お」「ご」「さん」「さま」の添加はやむを得ないが、その程度・範囲に問題が残される。近頃はつけ過ぎているように思われる。

(3) 対話体では、対称↓聞手↓あなた、側にだけつける。例えば：

ご両親 ご家族 ご出産 ご就職 ご親戚 ご卒業 ご友人 ご勉強 ご出張 ご旅行

ご健康 ご入学 ご結婚 ご成功 ご迷惑 ご安心 ご心配 ご機嫌

ご住所 ご病気 ご気分 ご許可 ご謙遜 ご承諾(知・認) ご出産 ご忠告 ご祝儀 ご冗談 …

お友達 お見合い お知り合い お祝い おからだ お許し

お電話 お庭 お宅 お住い お丈夫 お手紙 お葬式 お見事

聞手側には敬語をつけるが自分側には絶対につけない。

聞手側には

你的～ your～

お父さん お母さん

〔お〕兄(にい)さん 〔お〕姉(ねい)さん

妹さん 弟さん

ご両親は〔ご〕健在ですか

あなたは、いまだどちらの学校で、何を研究し

自分側

我的～ my～

父(ちち) 母(はは)

兄(あに) 姉(あね)

いもうと おとうと

父は二年前に亡くなりましたが、母はまだ元気です

早稲田の三年で、日本歴史をやって十おります、

て十いますか いられますか

卒業後は大学院ですか

挨拶 応 対

今日（こんにち）は

お早うございます

今晚（こんばん）は

どなた「様」ですか、でしょうか

でございますか

でございますか

ご免下さい

先生はおいでですか

ご在宅ですか、でしょうか

いただきます（頂戴「いた」します）

たいへんお邪魔「いた」しました、

今日はこれで失礼「いた」します

左様なら

「では」いってきます いってまいります

ただいま

ご苦労さま「でした」

います

そのつもりです「けど」…

今日は

お早うございます

こんばんは

高橋と申します

（でしょうか、とほかすと、より丁寧になる）

はい

ちょっと（しばらく）おまち下さい

どうぞおあがり下さい（1家へ）

（2茶菓、ご飯、などをすすめるとき）

「遠慮なく」どうぞ「おあがり下さい」

またどうぞおいで下さい

左様なら

いっていらっしやい「早くおかえり「なさい」」

おかえり「なさい」

どういたしまして

おやすみ

おやすみ

品 詞

1 名 詞 あらゆる人・物・事の名・著述・論文の表題など

ひと もの こと 源義経 桶 蚤 蠅 烏 菌 腰 毛 はたき 本 下駄 国連 タイ国 テレビ
 光 音 物理 哲学 電気 銭 雨 煙草 正月三日 大根 さんま 月 おつきさま 太陽 ゲバ棒
 虎 「吾輩は猫である」「徒然草」 失望 思考 野球：

(1) 数 詞 一二三四五六七八九十 十一 二十 八十五 百 三百 五千 二万 億 兆：

ひとつ 二つ 三つ 四つ 五つ 六つ 七つ 八つ 九つ 十 十一 十二 二十六：

(2) 量 詞 数えるものの性質によって異なる

酒一升 一升の酒 米三俵 十キロ 五尺 スカート一枚 着物一揃 洋服一着 手紙三通 何台の車
 (飛行機、汽車) コップ一杯のウイスキー 一碗の飯 木造瓦葺一棟 一組の学級 本五冊 一匹 二頭

一個 メートル グラム … (のは接続詞)

ひとり ひとり 二人 三人 四人 五人 六人 七人 八人 九人 十人 十一人 …

(3) 代 詞

いわゆる “こそあど” を用いる

指示 場所

他称代詞

連体語名詞

複数

これ ここ この人(方)

この人々(方々↓敬)

それ そこ その〴〵人
 あれ あそこ あの〴〵人
 どれ どこ どの〴〵人

かれ かれら

たれ(どなた「さま」↓敬) …… 疑問、不定

(4) 人称代詞

自称 わた(く)し わた(く)したち
 対称 あなた あなたがた 皆さん

他称 本名を称するか、「こそあど」による人称代詞を用いる。近年は、往々「彼」「彼女」も用いる。疑問・不定には「誰」「たれ」「誰方」「どなた」

以上名詞は活用がないから、語尾の活用する用言に対して体言という。もっともよく句の主語又は賓語になる。

2 動詞 語尾は活用変化する。終止形はウ段。

あらゆる人事物の動作・行為、はたらき又は存在所有を表わす詞語を動詞という。

(1) 自動詞 それだけで意味がまとまるもの、又は賓語(目的語)を必要としないもの。

(二) は主語述語を分け、一は賓語と動詞を分け、(の)前は連用語、(の)前は連体語

○私は、= 歩く 来る 行く 坐る 立つ 寝る 帰る …… 遊ぶ 怒る よろこぶ …… 死ぬ 自殺する
 …… 勉強する 予習する ……

動詞の自他動は必ずしも明確でない。死ぬ(自殺す(他)など)のようにはっきりするものもあるが、日常の動作・行為を表わすものには両用のものが少なくありません。

○道を一歩く 畳に一坐る 演壇に一立つ ベットに一寝る 家に一帰る …… (賓語一動詞)

といえ、他動詞になる。だから賓語の有無によって自他動が定まるといえるのです。換言すれば句における構造形態によって定まるといふことにほかならない。

○書齋に＝机がある　…　〃がある　自動詞（私は、書齋に、は主格助詞）

(2)他動詞　賓語を伴う動詞　…　賓語一他動詞

○本を一読む　ご飯を一たべる　学校へ一行く　車に一乗る　家に一いる　…　本は＝机の上に一ある　…　〃にある　は他動詞(を、へ、に、賓格助詞)

(1)双賓動詞　人とモノと二つの賓語を伴うもの。賓語の前後に定位はない。(…は前賓と後賓を分ける)

○君に・本を一やる　手紙を・母に一出す　疑問の点を・先生に一質問する

むろん単賓に用いても差支えない。

○君に一やる　本を一やる　手紙を一出す　先生に一質問する

(1)情意動詞　情意や官能のはたらきは往々長い語句(その中に用言述語がある)を賓語にとる。

○寒いと一感じる　それは困ると一思う　彼が結婚したことを一知っている

○金をためて外国へ留学しようと一彼は＝考えた(思った、言った、話した　…)

○リンゴの落ちるのを見て～ニュートンは＝地球に引力があることを一発見した(と、を、賓格助詞)

情意動詞といえどもむろん単語を賓語にとることができる。故郷を一思う　英語を一話す　彼は＝短

いゝ物語を一話した　文法のゝ方法論を一見つけた(は、主助、を、賓助)

(3)系詞　Copula

主語と賓語が同一又は同格であることを表わす特殊な動詞である。これを、自動詞、他動詞と同等に立てないと基本文型の区分ができなくなるが、従来系詞動詞を立てた文法書がないようです。

○吾輩はニ猫[・]で一ある ……である”は系詞動詞。いま猫と吾輩は同格 …… 猫は吾輩である

△あそこにニ机が一ある ……がある” ……自動詞)で、が、に、は格助詞だが、三者を区別するために、動

△本はニ机の上に一ある ……にある” ……他動詞) 詞に前接して、である、がある、にある、と呼ぶ。

○彼はニ映画俳優に一なる(な)った) ……ならない ……ならなかった

○吉田君はニ郷里でニ教師を一する(して)いる) ……していない ……したことがない

○子供はニ両親に一似る(にて)いる)似ています ……似ていない ……似ていません

○この花は(を)ニ牡丹と一いう ……と一いいます(と呼ぶ)と名づける)

○これをニ文法の方法と一いう ……いいます(を、主格助詞)

○これはニ文法の方法で一ある ……方法一である ……です ……でない ……であります

○私 ……はニ高橋という者一である ……者一です ……であります ……でない ……ありません

3 形容詞

体言の性質状態を表わす詞語を形容詞という。通例名詞に先行してその連体修飾語となるが、句の述語となつたときは表語という。連体語と名詞 主語ニ表語

(1) い音で終止する形容詞。相対性の詞が多い。語尾は活用変化する。

連体語と名詞 主語 述語

高い山 ……あの山は高い(形容詞又は形容詞性の述語を表語という)

美しい花 ……この花は美しい(表語)

低い 大きい 小さい 太い 細い 長い 短い 多い 少ない 好い 悪い 深い 浅い 暑い 寒い

暖かい 涼しい 速い 遅い(速度) 早い 晚い(時間) 明るい 暗い 厚い 薄い 遠い 近い 堅い

柔らかい うまい まずい 鋭い にぶい 美しい 醜い きれいな きたない ありがたい ぼそい 恐ろしい
 いはげしい いたましい 可愛い 憎い 男らしい あやうい おとなしい かゆい もどかしい 痛
 い めずらしい ばかばかしい ういういしい 生々しい 痛々しい ずうずうしい そそっかしい 騒
 騒しい あわただしい とげとげしい あらあらしい 女々しい せせこましい 青い 赤い 黄色い
 白い 黒い…

〇山は＝高く～そびえる 花は＝美しく～咲いた 太く、短く、生きる

連 体

終止

(口語)

(文語)

中止

連用(副詞)

〇高い 高い 高い 高き 高く 高く

〇青い 青い 青き 青く 青く

〇美しい 美しい 美しき 美しく 美しく

〇山は＝高く(中止形)、海は＝深い。美しく～青き～ドナウ

〇終止音“い”が“ざ”に変われば程度を表わす名詞になる↓高き 青き 美しき そそっかしき

(2)か音で終止する形容詞。語尾は活用しない。(1)と区別して(2)(3)を形容動詞ともいう。

〇静か 愚か なめらか おだやか おおらか ささやか はなやか …

表 語 述語になるときは、そのままの形では不安定なので一般に“だ”(である、です)を添加する↓海

〇静か＝静か+だ(である)です 僕は＝愚か+だ

名 詞 “ざ”を接尾すれば名詞に ↓ 静かさ(静けさ) なめらかさ …

連体語	"な"を介して連体語に ↓ 静かなる海	なめらかなる苦
連用語	"に"を介して副詞に ↓ 静かに寝る	愚かに「も」失敗した
(3)り音で終止する形容詞。語尾の活用はない。		なめらかに滑る
うんざり	がっかり しょんぼり ふんわり …	
表語	述語になるときには一般に"する"又は"だ"を添付する ↓ うんざり十する(した だ)	
	がっかり十する(した だ)	
連用語	"して" (する、の連用形)を介して副詞語 ↓ うんざり(がっかり) / して ~うづくまる	
	そのままで状語になるものもある ↓ しょんぼり「と」立つ	ふんわり「と」浮ぶ / して、と、は
	格助詞と区別して副助詞と呼ぶ)	
<p>基本構造を構成するものは主要語であり、主要語は主語と述語であるが、述語は動詞と賓語の配合のものが、 あるから、主要語とは結局、主語、表語(形容詞又は形容詞性述語)、動詞(系詞を含む)、賓語ということにな る。重要なことは主要語の表現を担当するものは、上來說べた、名詞・動詞・形容詞の三品詞に限られるとい うこと。</p>		
<p>主要語を潤色して句の意味を複雑多様にするものを付加語というが、付加語には助動詞、連体修飾語、連用 修飾語、補語、副詞、接続詞、格助詞、副助詞、語気詞などがあり、相当煩雑だから、第三編の付加語文法で 改めて論究することにする。</p>		

五 十 音 図

	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	
	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	
ん	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	あ
ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	段
今、重複する六音を差引くと四十五音	ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い	い
	※キ	リ	※イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	段
	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	う
	※ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	段
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	え	
※エ	レ	※エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	段	
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	お	
※ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	段	

右のうち、重複するもの、実際にはほとんど用いないものを除くと、二十六、七音

リ	ミ	ピ	ビ	ヒ	ジ	シ	ギ	キ
ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ
リ	ミ	ピ	ビ	ヒ	ジ	シ	ギ	キ
ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ
リ	ミ	ピ	ビ	ヒ	ジ	シ	ギ	キ
ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ

拗音

ぱ ば だ ざ が
 ぴ び ぢ じ ぎ 濁
 ぷ ぶ づ ず ぐ 音
 ぺ べ で ぜ げ
 ぽ ぼ ど ぞ ご